

作品構造の連関性に着目した国語科教材分析試案

— 『少年の日の思い出』の場合（1） —

松友 一雄

0 はじめに

文学教材の授業の構想は作品分析に始まり、教材分析を経て、それらの分析を反映した授業方法を組み合わせる過程として成立する。このような一連の授業構築の流れは、各段階の充実とともに段階相互の連関性が重視されてこそ、授業全体として完成されていくものであろう。この点については、既に理論的には確立されている。しかしその実践に向けての具体化は各段階、段階相互の連関性、どちらも教材として扱う作品の特性を如実に反映し、より具体的なアプローチを必要とするため、統一した結論に至っていないのが現状であろう。特に段階相互の連関性についての究明は、実験による実証性を必要とし、加えて学習集団のあり方や学習指導目標等の様々な要素によって左右されるため、個々の教材において試案を重ねていくことによって充足されなければならない。

そこで今回の論考において、特に各段階相互の連関性を重視した授業構想案の作成を試みる。

またこのような授業構築の方法とともに考えられなければならないのが、授業過程自体のあり方であろう。文学作品を教材として扱う場合、特に作品分析の段階で、各場面において個々のプロットの意味付けを行う作業と並行して、そのプロットを作品全体に関連させて意味付けする作業を行う。しかし後者の作業において明らかにされなければならないのは、作品の構造を基盤にしたプロット相互の関係であろう。すなわち授業過程の各段階において設定した核となるプロットの読みとりは他のどのプロットの読みとりの上に成り立っているのかという点を明らかにしていく必要がある。この点の解明は作品分析と教材分析をつなぐ重要な点であるとともに、学習者の学力の欠如している点を正確に把握するための大きな布石としてテスト問題等の作成段階まで一貫して授業構築に効果的な視点であると考えている。

以上の二点を中心にして授業試案を作成する。扱う教材はヘルマン・ヘッセ作の『少年の日の思い出』とする。この作品は作品分析にかなりの比重が置かれるために授業構築におけるバランスが崩れ易く、各段階の相互関連にまで配慮がなされないために、授業の一貫性が欠如する傾向にある。更に作品の構造が複雑な入り型であるために、視点が複雑に入り交じり、語りの視点を軸として授業を構築していく事が困難な作品であり、かつ場面間が分断されている部分があるために作品の構造を授業過程に反映させることによって授業自体の流れを分断してしまうという危険性を含み持つ作品である。このような作品は先

に述べた二点を特に意識しながら授業を構築していく必要があるため、私の主張の有効性を効果的に表せると考えている。

1 作品分析

① 第一場面（書斎でのやりとり）

この場面は細やかに個々の描写を把握し、その連関性を重視しながら作品分析を進めて行かないと、「情景描写」においても、それに支えられている「客」の「心情描写」も「暗さ」に支配されたものとして把握され易い。そこでこの場面の分析は「情景描写」と「心理描写」の細部にこだわった分析を中心に両者の関係がどのようなものであるか明らかにしていきたい。特に最後の点については、ヘッセがこの作品においてとっている叙述態度、つまり「心理描写」が極めて少なく、人物の行為や「情景描写」に置き換えられている登場人物の心理を把握した上で作品を分析していかないと、作品の構造が正確に見えてこないという点を考慮したものである。

この場面の「情景描写」は漸層的に表現しているとともに、残されたものを強調するライト・アップを効果的に行っているものと考えられる。具体的に本文に沿って説明を加えてみると以下の表のようになると考えられる。

| (本文) | (強調される事物) |
|--|-----------|
| I すると、たちまち外の景色はやみに沈んでしまい窓全体が不透明な青い夜の色に閉ざされてしまった。 | 部屋の中全体 |
| II わたしのちょうは明るいランプ光を受けて、箱の中から、きらびやかに光り輝いた。 | わたしの蝶 |
| III すると、わたしたちの顔は快い薄暗がりの中に沈んだ。彼が開いた窓のふちに腰かけると、彼の姿は外のやみからほとんど見分けがつかなかった。 | 客の声 |

Iの部分についてはその前の部分である「初めて、もうすっかり暗くなっているのに気づき、わたしは、ランプを取ってマッチをすった。」の部分で時間の経過をおさえているため、この部分の解釈はそれとは異なる効果をねらったものであると考える方が妥当である。すなわち部屋の外を暗くし、その存在自体を消し、残された部屋の中だけを浮かび上がらせているのである。それはこれから展開していこうとしている二人のやりとりをライト・アップするための演劇的手法による「語る場」を作り出す技巧なのである。

それではここでそのライト・アップされた部屋の中の様子について少し考えてみよう。確かに「明-暗」の二分化された構造としてこの場面を捉えるならば先の解釈も大きな意味を持つのであるが、浮かび上がった部屋の明るさはランプの薄暗い光なのである。すなわち部屋の中は外の暗さに対立するほどの明るさを持ち得ていないのである。しかしこの点を把握するのは、些か困難である。なぜなら次の文章の中にある「明るいランプの光を受けて」という叙述がそれを妨げるからである。

そこでIIの部分の解釈に移るのであるが、部屋の中も薄暗いという点を考えると、やはり「暗さ」の支配的なこの場面において、唯一「光り輝く」ものとして表現されている「蝶」の位置づけは、今後の物語の展開の一つの大きな起点として考えられる。ここで先の問題に戻ると、確かにランプの薄暗い光を受けている「蝶」もまたそれほどの光を放っているものとは考えにくいのであるが、あくまでこの「明るさ」が周囲の状況と相対的に表現されているとすれば、I、IIという一つの流れが浮かび上がってくるのである。すなわち、絶対的な「暗さ」を以て部屋の外を消滅させ、部屋の中もランプの薄暗い光によってぼかし、最終的に自らが光を放つかのような表現を以て、「蝶」を浮かび上がらせているのである。

最後にIIIの部分の解釈に移る。この部分は「わたしたちの顔」、「彼の姿」が全く闇に沈んでしまう。そして残されたのは、これから思い出を語る「客」の声だけである。視覚的な世界は消滅してしまい、音声だけが残る。これはこの場面とそれ以降の場面とに明らかに語り手の転換と時間の逆行とから分断されているために、視覚的な世界を削除し、場面をぼかすとともに、音声という共通の要素によって後の場面に違和感なくつなげていくための作者の工夫であると考えられる。そして次の場面以降も現在の「客」の視点から語りを混在させる事で、常に「思い出を語る」という設定を保ち続け、この場面を分断してしまわない工夫をしている。

以上がこの場面における「情景描写」の分析であるが、この詳細で技巧に富んだ「情景描写」はこの作品の特徴であるとともに、極めて少ない「心理描写」を支える大きな要素として、また間接的に登場人物の心理を表現する描写として位置づける事ができる。だとすれば、このように支配的な「暗さ」の中で、浮かび上がってくる「蝶」と結び付けられている「客」の心情こそがこの場面では重要となってくる。そこで具体的に叙述に沿って分析を加えていくと、確かに、

「もう結構。」

と言った。

その思い出が不愉快でもあるように、彼は口早にそう言った。

という叙述が支配的な場面の「暗さ」と相まって「客」の思い出に対する気持ちの「不愉快さ」が全面に押し出てくる。しかし他の部分を詳しく読みとっていくと、「彼が見せて欲しいと言ったので」、「妙なものだ。ちょうを見るくらい、幼年時代の思い出を強くそそられるものはない。」といった前者とは相反するような「客」の言動がみられる。さらに「君の収集をよく見なかったけれど。僕も子どものとき、むろん収集していたのだが、残念ながら自分のその思い出をけがしてしまった。実際、話すのははずかしいことだが、ひとつ聞いてもらおう。」という言葉とも相まって、「思い出を語る」行為に向かう一連の展開は「客」自ら作りだしたものである事が分かる。すなわちこの場面での「客」の心情は単純に「不愉快な」、「暗い」ものではなく、自らによって語られるという設定から、また先に列挙した「暗い気持ち」とは相反する言動から、「不愉快な」、「暗い」気持ちと思い出を「懐かしく思う」気持ちが混在した状況である事が明らかになる。

② 第二場面（十歳の頃）

この場面は以下の三つの部分から成り立っている。

第一の部分・・・「僕」の蝶に対する熱中ぶりを叙述している部分

第二の部分・・・「僕」の蝶収集の状況と「エーミール」の人物像を叙述している部分

第三の部分・・・コムラサキ事件の叙述

作品解釈において特に第三の場面に重点が置かれ、他の二つの部分には注意が払われないう傾向にある。しかし、第一の部分、第二の部分において叙述されている内容は後半の作品解釈において、重要な叙述、すなわち「僕」と「エーミール」の関係が如何なるものであるか、を解く鍵が多く潜んでいる。

そこで、両者の関係を明らかにする事に重点を置きながら、この二つの部分の分析を進めてみたい。第一の部分は更に「僕」の蝶収集に熱中する姿を具体的な行為として叙述している前半部分と蝶の美しさに魅了される姿を描いた後半部分に分かれている。前半部分は「僕」の熱中の度合いを具体的な行為として描き出している。当然それは「その遊技のとりこ」という言葉に収縮される。しかし前半部分では「僕」の蝶収集に対する熱意の強さは読み取れても、その熱意の内実は見えてこない。その内実を明らかにするのが後半部分なのである。その熱意は更に「むさぼるような、うっとりとした感じ」という表現として叙

述されている。そこでこの熱意の対象を明らかにしていく事は、「僕」の蝶収集の状況が如何なるものに支えられていたのか、またその蝶収集がどのようなものであったのかを把握する事を可能にする。叙述の中から該当する部分を抽出してみると、「美しいちょうをみると」「特別に珍しいものでなくたってかまわない」となる。この二つの叙述から「僕」の蝶収集を支える価値観が「蝶の美しさ」にある事が考えられる。この価値観は今後の作品展開において一つの軸として作品全体を貫いている。作者はこの「僕」の価値観を「僕」の蝶を見る詳細な目を通して表現している。この詳細な「僕」の蝶に対する観察眼は魅了されている「僕」の内部をえぐり出すものとして注目に値する。またこの作品は時間の経過がかなり急速な構成とっているが、「僕」のこの詳細な眼差しを通して描き出された蝶の姿はその急速な流れを停止させ、その美しさを絵画の如く精密に浮かび上がらせる。確かに、このような叙述は作者の描写の技術として独立して評価できるのであるが、更にその精細さが「僕」の蝶に対する魅了の度合いの高まりを表現されていると考えられる。

次に第二部分の分析に移る。この部分は「僕」の収集状況を現在の思い出を語る「客」の視点で客観的に描いている。そこには「僕」の「幼稚な設備」が記され、「重大で、評判になるような発見物や獲物があっても、ないしょにし、自分の妹たちだけに見せる習慣になっていた。」という「僕」の引け目の原因として位置づけられている。またそれとともに「エーミール」の人物像、収集状況が記されている。しかしこの作品において確定されている「エーミール」像は全て、「僕」の視点を通したものであり、あくまで「僕」に写った「エーミール」の姿であることに注目したい。

以上、この場面を構成する二つの部分についての分析を進めてきたわけであるが、作者はこの部分において「僕」、「エーミール」の人物像をそれぞれ独立した形で描き出している。しかしそれは先にも述べた「エーミール」像のあり方から考えても、あくまで両者の相対的な位置づけにおいて把握されなければならない。このような分析の視点をもうける事はこの場面以降の分析においても有効な方法であると考えられる。

そこでこの部分において確定された両者の蝶収集の状況について分析を進めることで、両者がどのような価値観に基づいて蝶収集を行っていたのかを明らかにしたい。叙述に沿って以下にその確定された収集状況を表にまとめてみる。

| 僕 | エーミール |
|--|--|
| 幼稚な設備 美しいちょうを見るとあの熱情が身にしみて感じられる | 小さく貧弱 こぎれいなのと、手入れの正確な点で一つの宝石のようなものになっ |

特別珍しくなくてもかまわない

重大で、評判になるような発見物や獲物があっても、内緒にし、自分の妹たちだけに見せる習慣になった

ていた。

非常に難しい、珍しい技術を心得ていた。

このように見てみると、両者の蝶収集に対して持っている価値観の違いが明らかになってくる。「僕」は「蝶の美しさ」に魅了されており、その詳細な観察眼からは蝶を生き物として捉えている点が明らかになる。それに対して「エーミール」は技術的に長けており、蝶を物として扱う、感情を伴わない収集を行っている。この点に関しては、更に両者の価値観がぶつかりあう、第三の部分、「コムラサキ事件」において明確になってくる。

そこで第三の部分の分析を行うとともに、両者の価値観の違いを更に明確にしたい。コムラサキを見た「エーミール」は「専門家らしくそれを鑑定し、その珍しいことを認め、二十ペニヒぐらいの現金の値打ちはある、と値ぶみした」のである。彼のこの鑑定はまさに蝶を商品として扱おうとするもので、先に挙げた彼の蝶を物として扱おうとする姿勢を裏付ける部分である。更に彼は技術的な欠陥を次々と指摘する。これはまさに彼の蝶収集に対して持っている価値観が「技術的完成」にあることを表している。

このような「エーミール」の価値観が「僕」のそれとは全く異なったものであることが「僕」の喜びを傷つけることとなる。この両者の違いは、「僕はその欠点を大したものとは考えなかったが」という叙述からもうかがわれる。この価値観のズレはこの後の展開を分析していくにあたって、常に念頭に置いておかなければならない。なぜならばこの後に起きる大きな事件は、終始「僕」の視点において語られるため、「僕」というフィルターを通して「エーミール」が語られていくという点を加味して叙述を分析する必要があるからである。

またこの場面においても一つ明らかにしておかなければならない点は、なぜ「僕」は自分の妹達にしか見せなかった「獲物」を「ねたみ、嘆賞しながら憎んでいた」エーミールに見せたのかという点である。それは両者の収集状況において見られる共通点を考えていくことで明らかになる問題である。すなわちそれは、ともに幼稚で貧弱な道具しか持たなかったという点である。「僕」が決して自分の獲物を見せようとしなかった少年達の持っていた、道具の善し悪しを重視する価値観はこの二人には見られないのである。そのため、両者は蝶に対して直接向き合った価値観を持つに至ったのであろう。そのまさに蝶に直接向かい合う収集姿勢が、「僕」の漠然とした意識のもとで「エーミール」に自分の価値観を理解してもらえる可能性を見いだす原因となっているのであ

る。がしかし結果として両者の接触は「技術的完成」と「美しさ」という表面的な価値観の違いによって破綻する。それは技術の高さによって道具の貧弱さを乗り越えていた「エーミール」と内に引きこもることで幼稚な設備を隠していた「僕」の少年集団の中での位置の違いでもあるのである。

③ 第三の場面（蝶を盗む場面）

この場面は「エーミール」がクジャクヤママユという大変珍しい蝶をさなぎからかえした、という事件を発端にして事件が展開していく。「僕」が蝶を盗むに至る一連の過程は、「僕」がクジャクヤママユの美しさに魅了されていく過程と、その高まりにつれて変容していくクジャクヤママユに対する欲望の経緯として捉えることが可能である。

当初、情報としてクジャクヤママユの存在を知った「僕」の興奮した姿を作者は「僕の知人の一人が百万マークを受け継いだとか歴史家リピウスのなくなった本が発見された」という情報を引き合いに出して、相対的な度合いとして「僕」の興奮の度合いを表現する。しかし「僕」の興奮の内実はこのような情報による興奮ではない。この直後にみられる「僕は本の中のその挿し絵を眺めた」から始まる「僕」の視覚的な興奮であろう。先にも述べたようにこの「僕」の蝶に対する詳細な観察眼は彼の蝶に魅了されていく姿を如実に投影したものであるから、興奮の内実もクジャクヤママユの珍しさに有るのではなく、「その大きな光るはん点は、非常に不思議な思いがけぬ外観を呈している」点に有るのである。そこで「僕」は「見たい」という欲望を抱くのである。

この「見たい」という欲望は蝶の持ち主が「エーミール」であるということも乗り越えてしまうほど強いものである。すなわち先の場面で確定された両者の蝶収集における隔絶、「エーミール」に対して抱いている劣等感を全て意識した上での欲望なのである。

それではこの欲望が「欲しい」という逆らいがたい欲望に変容するのはなぜなのであろうか。「僕」は「エーミール」の部屋に入るときまだ「せめて例のちょうを見たい」と考えているのであるからこの欲望の変容は「誰もいなかった」ことに起因するものではない。むしろその直後に描かれている彼の詳細な観察眼によって引き起こされるクジャクヤママユに魅了されたことによるものであると考えられる。彼の詳細な観察眼はいっそう詳細さを増した形で描かれており、「毛の生えた赤茶色の触覚」「優雅で果てしなく微妙な色をした羽のふち」「下羽の内側のふちにある細い羊毛のような毛」とその余りに細やかな視線は、彼の興奮の高まりを大きく反映している。しかし今挙げた部分では彼の変容は行われていない。すなわちその直後に見た「大きなはん点」こそその変容の直接の原因なのである。この部分の叙述は「挿絵よりはずっと美しく、ずっとすばらしく僕を見つめた」と擬人化されているが、やはり「僕」は先にもまして詳細な眼差しでこのはん点を見つめていたのであろう。

すなわち「僕」はクジャクヤママユの美しさに魅了されることで「見たい」

から「欲しい」へと欲望を変容させ盗みに至るのである。しかもこの「僕」の変容は計算され得るというものではなくむしろ非常に衝動的な興奮によるものである。

また「僕」を盗むという行為に至らしめたもう一つの要素として考えられるのが、この場面は「僕」と「クジャクヤマユ」との間に他者が全く介在していない点である。すなわち彼は「エーミール」の部屋に向かうときから盗むに至るまで、「だれにも、会わなかった」のである。この事は、「僕」が純粹に蝶の美しさに魅了された興奮に浸れ、かつ高められた空間を作り出していると共に、社会的規範を消し去る役割をはたしている。この点は帰りに女中と階段で出会うことによってくつつがえされていく。「その瞬間に、僕の良心は目覚めた。僕は突然自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟」るのである。

④ 第四の場面（蝶をつぶすに至る場面）

女中と出会うことは今まで他者を介在せず、「僕」と「クジャクヤマユ」によって構成されていた世界を変容させる。それは興奮の頂点にいた「僕」を一瞬にして現実に引き戻す。「僕」のこの後の蝶を返しに行くという行為は、「このちょうをもっていることはできない、もっててはならない、元に戻して、できるなら、何事もなかったようにしておかなければならない」という瞬間的な悟りによるものである。それは今まで消えていた「エーミール」という存在の出現と共に多くの他者の介在する現実に立ち戻った「僕」の「罪」からの回避であった。

この場面はこの罪の意識に支配された展開を持っていることは明らかなのであるが、その罪の内実については変化をたどることからこの場面の分析はその罪の内実についての分析を叙述に即して行っていくこととする。それは最終的に「僕」が蝶をつぶすという行為が「僕」にとってどのような意味を持つものかを明らかにする事となるからである。

「僕」が我に返ってからもちはじめ、様々な手段によって回避しようとした「盗みを犯した」という罪悪感は蝶が粉々になってしまったのを見たときに一変して「盗みをしたという気持ちより、自分がつぶしてしまった、美しい、珍しいちょうを見ているほうが、僕の心を苦しめた」というように「美しい蝶を壊した」という罪悪感に変容する。この二つの罪悪感はこの後の展開において入れ替わり重なり合いながら、「僕」にのしかかる。前者は特に「エーミール」に対して抱くものであり、後者は「美しい蝶」ひいては自分自身に対して抱くものである。この両者の違いは「僕」が「エーミール」に謝罪に行った際の「僕」の言動の解釈において重要な視点となる。

「僕」が「エーミール」に謝罪に行くことを洩るのは、「彼が僕の言うことをわかってくれないし、全然信じようもしない」とはっきり感じているからである。この点については「コムラサキ事件」による価値観の違いを自覚する事によるものであるが、それでは「エーミール」が何を分かってくれないと

「僕」は感じているのだろうか。それは「エーミール」が自分の罪を許してくれるかどうかという問題とは全く異なっている。すなわち「事件の偶発性」とともにその原因となった「蝶の美しさに魅了された自分の興奮」に対してなのだ。更に「僕」を渋らせたのは、「エーミール」に謝罪することでは決して解消されない自分に対する罪の意識が彼の心の中を大きく占めていたからである。

このような自分に対する罪の意識は更に「エーミール」の繕いの努力を見る時、再び一転する。彼は「エーミール」に対する罪を償おうと「おもちゃを全部やる」「ちょう収集を全部やる」と言うのである。しかし「エーミール」の拒否によって「僕」は「すんでのところであいつのどぶえに飛びかかりたい」衝動にかられる。この衝動の原因となっているのは決して「エーミール」に償いを拒絶されたからではない。「エーミール」の「君がちょうをどんなに取りあつかっているかということを見るのができたさ」という言葉に対するものである。すなわち「エーミール」は二つの意味で「僕」を責め、軽蔑しているのである。一つは社会的規範を犯して「盗んだ」という行為に対してであり、もう一つは美しい蝶を「壊した」という行為に対してである。特に後者は「僕」の苦しみの核心を突くものであり、その苦しみを突かれた「僕」はやっきになって「エーミール」に飛びかかろうとするのである。まさにこの点は「僕」が蝶収集において基盤としていた価値観を「僕」が持ち合わせていないという指摘であり、「僕」の蝶収集自体の否定であった。つまり「僕」が自分の収集した蝶をつぶすのは、自分が蝶収集を行う上での基盤となる価値観を否定されたからであり、解消することの出来ない罪の意識を何とか解消しようとしたからである。彼の罪の意識の中心は自分に対する「美しい蝶をつぶしてしまった」という自己の蝶収集における基盤の喪失であり、「エーミール」に対する「蝶を盗んで、破壊してしまった」という社会的規範に沿った罪の意識ではないのである。それは自責の念を深く呼び起こすもので、自分と向かい合う契機となり何らかの自己変革をもたらすものなのである。

2 教材分析

これまで述べてきた作品分析に基づいて教材分析を行うわけであるが、その際にぜひとも必要な点として、学習者がどのような読みを形成するのかという点とその形成された読みが作品のどの部分の読みとりと関係づけられて形成されたのかという点、さらにはどのような教授方法、授業展開をとることによってそのような読みとりが形成されるのかという点の三点が考えられる。これらの点はどれも実際の授業の中から帰納的に導き出されなければならない点である。更にそれはより多くの授業を分析することで方法論として普遍性を高め確立されていく必要がある。

① 第一の場面（書齋でのやりとり）

従来の授業実践記録においてこの場面の教材分析では、作者の情景描写の詳細さを読みとらせる点に力点が置かれ、特に次第に暗さを増していく情景に時間の推移や人物の心情を読みとらせようとするものが多い。しかしその結果、以下の*1佐藤氏の実践記録にみられるように学習者の反応は場面全体に支配的な「暗さ」に引きずられやすい。氏の授業ではこのような情景描写の効果を場面全体の雰囲気としてまとめているが、その記録を提示してみる。

- | | |
|---|------------|
| a | 暗くて静かな感じ |
| b | シーンとしている感じ |
| d | 重苦しい |
| e | なにかものさびしい |

このように情景描写を「暗さ」を表現するものとして読みとっていくと、心理描写との関連を作品の特徴として授業展開に持ち込んだ際、どうしても「客」の心情が「不愉快な」「暗さ」に満ちたものとして捉えられやすく、作品全体の読みとりにおいてもその「暗さ」を引きずることとなる。そこで今回の試案においては、「情景描写」の読みとりの際に作品分析で示したように「明るさ」に着目させる過程を組み込み、作者の意図する「情景描写の工夫」に近づいて行こうと考えている。そこで具体的な教材分析を以下に示す。

この場面の大きな目標としては「情景描写」に見られる作者の仕掛に気付く点と「客」の思い出に対する考えが「暗さ」に支配されたものではなくむしろ、懐かしさと混在したものであることを読み取らせる点にある。そこで情景描写の把握の際には当初、視覚的に「情景描写」を把握させ、場面全体の情景の変化ををさえた上で、「薄暗い部屋の中で何が見えていますか。」という発問を起点として、消えていったものではなく、情景の変化に沿って残っているものへと目を向けさせたい。

このようにして作者の意図するライト・アップの効果を把握させた上で、最後の「客」の声だけが残る部分に着目させることで「客」の思い出に対して抱く心情の把握へとつなげていきたい。すなわちこの部分はこれから「客」が思い出を語る場面へと移行していくために、声だけが焦点化された部分であるため、「客から思い出を語る」という事実は導き出せるであろう。そこで「客の思い出話とはどの様な内容だと思うか」と予測させ、その根拠となる部分をこの場面の「客の言動」から見つけ出させる。その過程の際に恐らく答えとして浮かび上がってくるのが、G、H、I、であろう。

G 「もう結構」

H その思い出が不愉快でもあるかのように、彼は口早にそう言った。

I 「悪く思わないでくれたまえ」と、それから彼は言った。「・・・ひ

とつ聞いてもらおう。」

G、Hといった部分は「客」の思い出に対する「暗い」気持ちを表現している部分である。しかしここから「懐かしさ」を含んだ複雑な気持ちへと読みを変えていくためには、次のIを起点とした一連の過程を必要とする。Iの部分の言動はこの「暗さ」と「懐かしさ」の入り交じったものである。具体的には「いやな思い出をなぜ友人に語ろうとするのだろうか」という切込み口からこの部分の心情が暗さとは別の何かを含み得るものであることを導き出す。そこでB、Fの表現に注目させ間接的に表現されている「懐かしさ」を読み取らせたい。

B 彼が見せてほしいと言ったので、

F 妙なものだ・・・収集家だったものだ。

また蝶をライトアップさせた箇所は、作品分析でも述べたように、「僕」の魅了の高まりを示す「詳細な観察眼」に当たる部分であるためにこの場面の読みとりにおいても扱うべきところなのであるが、むしろ次の場面にて「僕」が蝶に魅了されている事を読み取るときに、「僕」の蝶を見る目が詳細な点を導き出すための比較の材料として、この部分の描写を扱っていくこととする。

② 第二の場面（十歳の頃の僕）

従来の授業実践において重点が置かれるのは後半部分の「コムラサキ事件」の経緯の読みとりとその結果「僕」の心情にどのような変化が起こったかという点の把握である。しかし今後の作品の展開の中で「僕」と「エーミール」の関係を明らかにしていくこと、つまり「僕」がどのように「エーミール」を捉えていたかを明らかにすることは、事件の中で変化していく「僕」の心情を考える際の重要な観点となるため、この場面では両者の収集状況を彼らが蝶収集に対して抱いていた価値観にまで高め、把握させる必要がある。それは多くの授業実践において学習者の示す反応が以下の点に集中する点を考慮したものである。

- 1 「僕」は「エーミール」に対して強い劣等感を抱いている。
- 2 それは「エーミール」が完全な優等生であり、「非の打ちどころのない」少年であるからである。
- 3 「僕」がコムラサキを「エーミール」に見せるのは彼に少しでも認めてもらいたいからである。

すなわち学習者の形成する両者の関係は「優劣」の関係でしかなく、価値観

の違いという把握は起きにくいのである。これでは作品を通して流れている両者の価値観の違いに気づくことなく、この後に起こる事件の読みとりの際も、「僕」と「エーミール」の関係は「善悪」の関係としてしか捉えられない。

そこでこの場面においては主に「僕」と「エーミール」との蝶収集に対する価値観の違いを彼らの収集状況を記した前半部分から読みとらせる過程を設定したい。その際には「彼らが蝶収集において重視していた点」を明らかにしていく過程をたどることとなる。それでは以下に教材分析を示すこととする。

前半部分は『「遊技のとりこ」とは具体的にどのような様子ですか』という発問から「蝶収集」に熱中していた「僕」の姿を具体的に読みとらせ、次の叙述へと移行する。この際につなぎの発問として考えられるのが「このように蝶収集に熱中していたのはなぜか」である。これは先にも述べたように、前半部分が「具体的な行為として熱中ぶりを叙述する部分」と「蝶の美しさに魅せられている僕の姿を叙述する部分」に分かれていて、特に後者に着目しているからである。

そこでこの部分では、「僕の蝶に対する詳細な目」に気づかせたい。これは先にも述べたように「蝶を盗む場面」の際の僕のクジャクヤママユに対する詳細な眼差しを「蝶の美しさに魅了された僕」と結びつけていくための一つの手がかりとするためである。そこで前時で扱った、私の蝶を見る目と比較させ、さらにこの部分の叙述の詳細さからこの点に気づかせたい。

次に後半部分についてであるが、この部分では「コムラサキ事件」が二人の関係を明確にする部分であることから、この事件の読み取りを行うことによって二人の関係がどのようなものであったのかを把握させたい。そこでまずこの事件に至るまでの経緯をおさえていかねばなるまい。まず二人の蝶収集の状況を作品分析において指摘した部分から把握させ、切込みとして「僕」が「自分の妹にしか見せなかった蝶収集をなぜエーミールに見せたのか」という発問によって、「僕」の視点からのエーミール像を明確にしたい。

続いて、「コムラサキ事件」の読み取りへと移るのであるが、まず「エーミール」が「僕」の蝶に対してどの様に批評したのかを把握させ、「エーミールにとって一番素晴らしい蝶とはどの様な蝶なのか」という発問から、彼の蝶収集に対する価値観が「珍しさ」「技術の高さ」にある点に気付かせたい。更に「僕にとって・・・」と同様の質問を重ね、「特別珍しいのでなくたってかまわない」という叙述に立ち戻り、「珍しさよりも美しさ」を重視する僕の価値観を把握させる。この際に彼の蝶に対する目の詳細さを補強として使ってもよい。また「僕はその欠陥をたいしたものとは考えなかったが」という点からも両者の価値観の違いには切り込んでいける。

具体的に両者の関係について考えていくこととなるのであるが、以上の前提から「僕はエーミールに対して自分の価値観とは違う事をうっすらと気付いていながらも、それを引け目として感じている」ということになるだろう。

また学習者の発達段階に応じて、作品分析で挙げた「両者の共通点」から「僕」がなぜ「エーミール」にコムラサキを見せたのかという点を考えていく

過程も考えられる。

③ 第三の場面（蝶を盗む場面）

この場面を扱った授業の多くは先の場面において「僕」の蝶に対する魅了の内実が読みとられていないために、彼の「盗む」という行為自体が学習者の中で顕在化し、「僕」の人物像が「欲しい」という欲望にかられた「悪者」として確定し易く、今後の展開の読みとりが「善悪」の判断基準によって位置づけられていく傾向にあることから、今回の試案では「見たい」から「欲しい」という心情に変化する過程を丁寧に読みとらせ、その変化の原因となった「僕」の「蝶に対する魅了」された姿を学習者の中に形成したい。このような意図に従って具体的な教材分析を以下に示したい。

この部分では「蝶を盗む」行為が衝動的に行なわれた事と、つぶした蝶を見て僕が感じた苦しみは「罪の意識」ではなく「美しい蝶を壊してしまった」というものであったことを把握させたい。

具体的な指導過程としては、場面の冒頭で押えるべき、僕のクジャクヤママユに魅了されている姿は、これまでの授業過程において明らかになってきたことの繰り返しであるために、時間の経緯とそれを保持し続けた僕を注意しながら導入部分として設定したい。むしろこの点よりも、クジャクヤママユの美しい羽に魅了されていく僕の姿をここでは把握させたい。具体的には「本の中のその挿絵を眺めた」という叙述からあの「美しい蝶を詳細に見る目」を想起させ、友人の言葉から僕がクジャクヤママユの美しさに魅了されていた点を明らかにしておく。

次に実際に盗む場面の具体案を示す。「蝶を持っているのがエーミールであることが僕にとってどのような意味を持つのか」という点を先の場面において確定した「僕とエーミール」の関係からそのような関係をも乗り越えてエーミールの家に向かう僕のクジャクヤママユに魅了された姿を把握し、その魅了の度合いがいかほど強烈なものであるかという点を更に把握させたい。このような点と共に「当初、盗むつもりで行ったのではない点」もおさえておきたい部分である。なぜならクジャクヤママユの美しさに魅了されて「見たい」という気持ちから「欲しい」という気持ちへと変化していく僕的心情を押える際の出発点にしたいからである。そこでこの部分では「せめて例のちょうを見たい」という部分に着目させる。更に「せめて・・・」という表現から両者の関係を補強する事も可能であろう。

次に「盗む場面」を叙述に沿って読みとらせ、その魅了の度合いが高まっていく過程を読み取らせる。ここで注目させたいのが展翅板にのっているクジャクヤママユを見る部分である。この部分はこれまでの授業過程で何度も扱ってきた僕の蝶を見る詳細な目が叙述されている部分で美しさに魅了されていく僕の姿を如実に表している部分である。またこの部分は非常にゆっくりとした展開で描写されている部分なので、区切ったり説明を差し挟んだりする事なく叙

述に沿って読み味わわせたい。そのような考えからこの部分では「なぜ僕は蝶を盗んだのか」という点のみを解明させたい。それは今まで見てきた「僕の魅了される姿」から簡単に導き出せると考えているが、特に注意させたい部分は、「四つの大きな不思議なはん点に見つめられた」という叙述において魅了の頂点に達し、「見たい」から「欲しい」に変わる瞬間であろう。

次に後半部分の授業過程について考えていくこととする。まず、前時からのつなぎとして、女中と出会い我に返る僕の姿から、盗みが衝動的に、蝶の美しい姿に魅了されて起こった点を再確認させたい。その後、蝶がつぶれたのを確認するまで「僕」は「罪の意識」によって支配されている。この部分は「美しいものを破壊してしまった苦しみにさいなまれる僕」を把握するためには必要な部分であるので読み取らせて置きたい。その際に注目しなければならないのが、「できるなら、何事もなかったようにしておかねばならない」と悟る部分である。この部分から、僕が盗みをもみ消そうとしている点を押えさせたい。

ここまでで、「盗み」を犯してからの一連の流れは途切れてしまう。その契機となるのが、つぶれた蝶を目の当たりにする部分である。「つぶれた蝶を見ることで僕にはどのような心情の変化が生じたのか」が大きな布石となって、「僕の苦しみの内実」に迫っていくことが可能となる。具体的には「盗みをしたという気持ちより、自分がつぶしてしまった、美しい、珍しいちょうを見ているほうが、僕の心を苦しめた」という叙述の読みとりとなってくるであろうが、ここでは「なぜ罪の意識よりも先にこのような苦しみを持つのか」という点を起点として、「蝶の美しさに魅了されている僕の姿」の補強と彼の価値観が「美しさ」にあった点を想起させておきたい。

④ 第四の場面（蝶をつぶす場面）

私がこの作品を使って場面間の連関性を重視した作品分析・教材分析を主張しようとしたのは、この最後の場面の読みとり、すなわち「僕」が「蝶をつぶす行為」の読みとりにおいて、多くの授業実践が『「エーミール」に対する償いとして』という解釈を越えようと努力を重ねている点に着目したからである。学習者がこのような読みとりを行う原因として考えられるのが、「僕」と「エーミール」との関係の把握が「善悪」の価値基準に基づいたものである点である。そこでこの点の解消のためにはやはりそれ以前の場面で今までに述べてきた点を重視して授業を構築していく必要があったのである。

この場面においては「蝶をつぶす」事が僕にとってどのような意味を持つのかを考えていくことを中心に据えその二面性をそれまでの過程で把握しておくことを目標として設定したい。この場面の授業に当たっては、前時に明確にした彼の苦しみの内実に基づき、「美しい蝶をつぶしてしまった」事に対する苦しみを出発点としたい。この点を押えることによって、「エーミール」に謝罪することをためらう気持ちが理解できるのである。すなわち「僕」の苦しみは僕自身に向けられたものであるために母の言うような「エーミール」に対する謝

罪はあまり僕にとっては重要なものではない。加えて、そのような僕の苦しみは「エーミール」には理解されないものであるために僕は謝罪に行くのをためらうのである。このような解釈をもとにして、この部分の授業過程を構想するとすればやはり切込み口は「僕は出かける気になれなかった」という叙述であろう。このように思う原因を考えていくことで、両者の関係は再び想起される。そこで「僕」が「エーミール」に対して抱いていた劣等感をともなった価値観の違いは以降のやりとりを考えていく際の重要な手がかりとなるであろう。

次に具体的にやりとりの部分の扱い方を考えていく。この部分はいくまで「エーミール」の行為を「僕」がどう受けとめていたのかという点に留意させながら読み取っていかなければならない。そこで注目させたい部分として考えられるのが、「エーミール」の修繕の努力の後を見る部分である。それまで自分が「美しい蝶を破壊してしまった」という苦しみにも苛まれるあまり、あまり重視していなかった社会通念における罪の意識を「僕」が自覚している部分である。「エーミール」の修繕の努力を目の当たりにした僕はここで「エーミールに対する罪の意識」を自覚するのである。さらにその償いとして、「おもちゃを全部やる」、「蝶収集を全部やる」という叙述を位置づけていくことによって前時とのつながりができてくる。さらに「エーミールの拒絶の言葉」の部分、特に「君がちょうをどんなに扱っているか・・・」の部分で「エーミール」自身から自分の苦しみの本質をつかれた「僕」は飛びかかろうとする衝動に駆られるのである。

そこでこの部分の授業過程としては、この部分を切込み口としてなぜ「僕」はこのように思ったのかという点を確定していく。そこで「エーミール」の拒絶の言葉が「僕」に対して二つの点を責めているのに気づかせたい。それは「蝶を盗んだ」という社会規範に基づく罪と「美しいものを壊した」という「僕」自身の苦しみのためである。

すなわちこの二つの糾弾を受けた「僕」は「僕は悪漢だという・・・前に立っていた」という叙述に見られるように「エーミール」が見えたのであろう。以上の二点の糾弾を受けたことを前提として最後に「蝶をつぶす行為」は「僕」にとってどのような行為であったのかについて考えさせたい。それは「盗んだ」という行為に対する罪悪感よりも、むしろ自分自身の苦しみとしてある「美しい蝶を壊してしまった」という自責の念から自分自身を見つめ直す機会を得て「蝶収集との決別」の意味をこめて蝶をつぶすのである。

3 おわりに

今回の論考は昨年一年間続けてきた授業実践記録の分析によって得た学習者の反応傾向を基にして、この教材を扱った授業の問題点を抽出し、その学習者の反応がどの部分の読みとりから生じているのかを手がかりとして改善策を試案として提示するに至った。その結果、作品分析、教材分析、それを反映した具体的な方法の組み合わせという三つの段階において、常に場面間の関連性を

重視する事が必要であることが明らかになった。さらに教材分析から具体的な授業方法の組み合わせの段階を重視していく必要性も明らかになった。特に二点目については実験授業においてその有効性を検討していく過程が必要であると考えられる。

なお、今回の論考においては各授業実践記録の分析、授業計画細案、評価項目等の設定を紙幅の都合上割愛せざるを得なかった。これらについてはまた別の機会に発表したいと考えている。

注

- 1 佐藤喜美子氏『「少年の日の思い出」の教材研究と全授業記録』
『実践国語研究 別冊 No.94』掲載を参照

なお、佐藤氏の実践記録に加えて学習者の反応傾向を抽出するために以下の諸氏の実践記録を参考とした。

| | | | |
|---------|----------------|-------------|----|
| 山口 勉昭氏 | 『中学国語』10 | 文学教材の主題把握 | 掲載 |
| 大西 忠治氏 | 『文学教育実践史辞典』第二集 | | 掲載 |
| 白石 等氏 | 『文学教育実践史辞典』第二集 | | 掲載 |
| 山田 利彦氏 | 『中学国語』1 | 教材研究と授業 | 掲載 |
| 茂木 久美雄氏 | 『中学国語』6 | 文学教材の特色ある授業 | 掲載 |